



(1) 中長期計画

2037年の創立150周年を見据えた取り組みで、「未来を哲学する、東洋大学」をスローガンに以下の6つの基本方針が掲げられている。
 ①3万人のLearning Journeyを支える新しい教育の姿の創造 ②多様な学生の課外活動及びキャリア形成への支援 ③SGU×SDGsによる国際教育の推進 ④ブランドとなりうる連携・共同研究を促進 ⑤特色あるリカレント教育の推進と社会貢献活動の拡大 ⑥多様なある教員組織の拡充と教職協働の強化

(2) 文部科学省

「大学の世界展開力強化事業」
 国際的に活躍できるグローバル人材の育成と、高等教育のグローバル展開力を強化するため、高等教育の質の保証を図りながら、日本人学生の海外留学と外国人学生の受け入れを行う国際教育連携の取り組みを支援する事業。

(3) 東洋大学重点研究推進プログラム

超スマート社会（Society5.0）の到来に向け、地球レベルの課題解決に貢献する独創的かつ先端的な研究プロジェクトの支援を目的に創設されたプログラム。学内公募で採択されると助成を受け、3年計画で研究活動を推進していく。研究領域を超えた文理融合型で学際的なプロジェクトチームとして取り組むことが重視されている。

(4) TOYO スポーツセンター

2016年に策定された「TOYO SPORTS VISION」をベースに、「トップアスリートサポートセクション」「スポーツ連携セクション」「マネジメントセクション」の3つのセクションを設置。学生アスリートのメディカルおよびフィジカル面でのサポートや、運動部による社会貢献・地域貢献活動の推進のほか、大学が一体となる応援文化の醸成などを目的としている。



朝霞キャンパス(埼玉)完成予想図 ©株式会社石本建築事務所



白山キャンパス(東京)



川越キャンパス(埼玉)



赤羽台キャンパス(東京)

ハードとソフトの両面で学生の学びやすさを追求
 東洋大学ではこれまで、キャンパスの再編や学部学科の改革を精力的に進めてきました。近年では、日本を代表する建築家・隈研吾氏が設計を手がけた赤羽台キャンパスが2017年に開設。その後順次拡大してきましたが、2023年にこれまでの情報連携学部に加え、福祉社会デザイン学部と、初のスポーツ系学部である健康スポーツ科学部の3学部が集まるキャンパスとなりました。健康スポーツ科学部の新設を契機に「TOYOスポーツセンター」の活動もスタート。多くのオリンピック選手やプロスポーツ選手を輩出してきたものの、従来は各種目の指導者に頼る部分が大きかった学生サポートを、大学全体で推進する体

制が整備されました。同センターはスポーツを通じた地域連携にも積極的に取り組んでいます。
 2024年には、朝霞キャンパスに生命科学部と食環境科学部、理工学部の一部が移転。生命科学部は生命科学科、生体医工学科、生物資源学科の3学科に、食環境科学部は食環境科学科、フードデータサイエンス学科、健康栄養学科の3学科にリニューアルします。これからの新しい生活様式を踏まえた教育研究に関する施設設備を充実させ、「いのちと食が輝くスマートキャンパス」になります。研究室単位で個別の研究に没頭しがちな理工系学部において、学生が出会い、交流を深めることで、新たなアイデアの創出が期待できるスペースをキャンパスの随所に設けるのも大きな特色です。
 さらに、川越キャンパスは2027年を目標に「新しい科学を追求するこもれびの森のキャンパス」をテーマにリニューアル。新学部も開設される計画です。

こうしたハード面の整備が進む一方、DXやソフト面の改革も進められ、2022年から運用中の「東洋大学公式アプリ」は99%の学生が使用しています。2023年には「ディスカバー」という新機能が追加され就職活動や資格取得に関する情報から奨学金の案内、学内での学生アルバイト募集、サークルや学生団体の活動案内、運動部の大会情報まで、多種多様な情報を掲載。学生は発信

イメージも機械学習の対象とし、その言葉を使う人が何をどう伝えたいのかを分析できるAIの開発を目指し、と

1の分析力や読解力を高める一方、人の想像力の豊かさを証明できる可能性もあるといわれています。このような意外とも思える組み合わせによる化学反応を期待しています。

2024年には、朝霞キャンパスに生命科学部と食環境科学部、理工学部の一部が移転。生命科学部は生命科学科、生体医工学科、生物資源学科の3学科に、食環境科学部は食環境科学科、フードデータサイエンス学科、健康栄養学科の3学科にリニューアルします。これからの新しい生活様式を踏まえた教育研究に関する施設設備を充実させ、「いのちと食が輝くスマートキャンパス」になります。研究室単位で個別の研究に没頭しがちな理工系学部において、学生が出会い、交流を深めることで、新たなアイデアの創出が期待できるスペースをキャンパスの随所に設けるのも大きな特色です。

元部署や団体が独自にデザインしたポスターをまとめてチェックできるようにになりました。今やこのアプリは学生生活に必須のツールとなっています。

ています。これには、短歌を専門として、人の読解プロセスを研究テーマとする文学部の教員も参加予定。A

2023年度は「SDGs留学生アンバサダー制度」の1期生として、フランス、韓国、中国の出身者が入学し、日本人のアンバサダーと協力しながらSDGsの達成に向けた活動を展開しています。日本人学生が外国人留学生と協力できるのは、SGUの環境で着実に語学力を高めて

2024年には、朝霞キャンパスに生命科学部と食環境科学部、理工学部の一部が移転。生命科学部は生命科学科、生体医工学科、生物資源学科の3学科に、食環境科学部は食環境科学科、フードデータサイエンス学科、健康栄養学科の3学科にリニューアルします。これからの新しい生活様式を踏まえた教育研究に関する施設設備を充実させ、「いのちと食が輝くスマートキャンパス」になります。研究室単位で個別の研究に没頭しがちな理工系学部において、学生が出会い、交流を深めることで、新たなアイデアの創出が期待できるスペースをキャンパスの随所に設けるのも大きな特色です。

他大学が総合型選抜や学校推薦型選抜といった年内入試の比率を高める中、東洋大学は一般選抜での入学率比率が64%程度と高いのが特徴です。また、「英語重視型の入試」「多教科(4・5教科)型の入試」「文系学部での数学必須入試」を重視しています。その狙いについて、矢口学長はこう話します。



やくちえつこ 矢口悦子学長
 1980年お茶の水女子大学文教育学部教育学科卒業。86年同大学大学院人間文化研究科(博士課程)単位取得満期退学。専門は社会教育学、生涯学習論。お茶の水女子大学非常勤講師、千葉大学非常勤講師などを経て2003年より東洋大学文学部教授、社会貢献センター長、文学部長のち2020年より現職。

付与された学生が誕生しました。2023年度は「SDGs留学生アンバサダー制度」の1期生として、フランス、韓国、中国の出身者が入学し、日本人のアンバサダーと協力しながらSDGsの達成に向けた活動を展開しています。日本人学生が外国人留学生と協力できるのは、SGUの環境で着実に語学力を高めて

きたからこそで、矢口悦子学長も次のように話します。
 「例えば社会学部の学生なら、海外での移民の暮らしを社会学の視点で探究し、理工学部の学生なら、留学先の建造物の特徴と災害対策の関係を紐解いてみるなど、グローバル教育を語学力の向上から次のステップへと進め、すべての学部学科において『SGU×SDGs』を推進します」

ダイバーシティ&インクルージョンにも注力
 東洋大学におけるグローバル社会への貢献の一つとして、「ビジネス日本語教育を通じた高度日本語人材と多文化共生グローバル人材の育成プログラム」が、2022年に文部科学省の「大学の世界展開力強化事業」に採択されました。従来からビジネス日本語教育のオンラインコンテンツを世界中の受講者向けに開発してきた実績が、採択を後押ししました。同事業では外国人学生が東洋大学で学ぶための費用を国が負担するほか、東洋大学の学生が海外の協定校に留学する際、現地で日本語教育を行う教員のアシスタントとして働くことを条件に、国が補助金を支給。この学生の受け入れと送り出しを5年間行うこととなっており、2023年度は7カ国12大学との間で運用されています。

た「ダイバーシティ&インクルージョン推進プロジェクト」が立ち上がる見込みです。日本のジェンダー平等に関する順位の低さが問題となる中、東洋大学は学長自身が女性であり、全14学部のうち4学部の学部長が女性です。
 「職員の女性比率や、管理職の女性比率の高さを維持しながら、今まで以上に女性が自信と能力を高められる環境づくりを進めていく方針です。アンコンシャス・バイアス(無意識の偏見)をはじめ、女性が感じる壁の根本的な要因を解明し、学内への提言を行うワーキンググループづくりから着手していきます」(矢口学長)

哲学者の井上円了博士が1887年に創設した「私立哲学館」を起源とし、現在は14学部48学科を擁する総合大学に発展している東洋大学。近年は新キャンパスの開設や既存キャンパスの整備、学部学科の再編や新設などを進めながら、アプリなどのオンラインツールを駆使した学生サポートを推進するほか、SDGsやAIをはじめ、社会的ニーズの高いテーマに学生が主体的に関われる環境づくりを進めています。
 2022年7月には、ウクライナのゼレンスキー大統領が国内の大学では初となるオンライン講演を行ったことも注目されました。その原点には時代を切り拓く改革力があり、「進路指導教諭が評価する大学ランキング2022」(大学通信)の「改革力が高い大学(全国編)」で6位に入るなど、毎年高く評価されています。

「職員の高さを維持しながら、今まで以上に女性が自信と能力を高められる環境づくりを進めていく方針です。アンコンシャス・バイアス(無意識の偏見)をはじめ、女性が感じる壁の根本的な要因を解明し、学内への提言を行うワーキンググループづくりから着手していきます」(矢口学長)

「職員の女性比率や、管理職の女性比率の高さを維持しながら、今まで以上に女性が自信と能力を高められる環境づくりを進めていく方針です。アンコンシャス・バイアス(無意識の偏見)をはじめ、女性が感じる壁の根本的な要因を解明し、学内への提言を行うワーキンググループづくりから着手していきます」(矢口学長)

「職員の女性比率や、管理職の女性比率の高さを維持しながら、今まで以上に女性が自信と能力を高められる環境づくりを進めていく方針です。アンコンシャス・バイアス(無意識の偏見)をはじめ、女性が感じる壁の根本的な要因を解明し、学内への提言を行うワーキンググループづくりから着手していきます」(矢口学長)

研究活動に目を向けると、中長期計画では、総合知の探究を目指す文理融合型研究が重視されています。現在8件が重点研究推進プログラムの助成対象として採択され、学部の垣根を越えて教員が連携。若手研究者の養成を目的に、多くの大学院生も参画しています。
 例えば、バイオミメティクス(生物模倣)の研究では、研究の意義や目的などを小学生も理解しやすいように教育心理学が専門の教員と連携。小学生向けのイベントも企画しています。また、AIに関連する研究では、言葉の辞書的な意味に加え、その言葉から連想される通俗的なイ

創立150周年に向けた不断の改革と地球規模の課題解決に挑む教育でグローバル社会を拓く人材を育成

「職員の女性比率や、管理職の女性比率の高さを維持しながら、今まで以上に女性が自信と能力を高められる環境づくりを進めていく方針です。アンコンシャス・バイアス(無意識の偏見)をはじめ、女性が感じる壁の根本的な要因を解明し、学内への提言を行うワーキンググループづくりから着手していきます」(矢口学長)